

トビウオ通信 (H24 第3号)

<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《平成 24 年度上半期浮魚中長期漁況予報》

平成 24 年 3 月に開催された東シナ海～日本海南西海域にかけての対馬暖流域における主要浮魚類の長期漁況予報会議の内容を基に、山陰沖のまき網漁業が対象とする主要浮魚の平成 24 年度上半期（4～9 月）の中・長期的な漁模様の予測をします。

山陰沖における漁況(来遊)予報〔平成 24 年上半期(4～9 月)〕

マアジ:前年を上回る

マサバ:前年並み

カタクチイワシ:前年並み

ウルメイワシ:前年を上回る

マイワシ:好調であった前年並み

※ 本文中で「上半期」は 4～9 月、「下半期」は 10～翌年 3 月、「平年」は過去 5 年（平成 19～23 年度の各上半期）の平均値、「前年」は平成 23 年度上半期をいいます。

マアジは前年を上回る

東シナ海～日本海南西海域の漁況と今後

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマアジの漁獲量は、平成 20 年以降増加傾向にあり、平成 23 年は前年を上回る 4 万 6 千トンでした（図 1）。沖合域の今後の漁況は前年並みに推移すると予測されています。

一方、鹿児島県から山口県の沿岸域における平成 23 年 11 月～24 年 1 月の漁獲状況は前年・平年を上回りました。今後は前年を上回り、平年並みに推移すると予測されています。

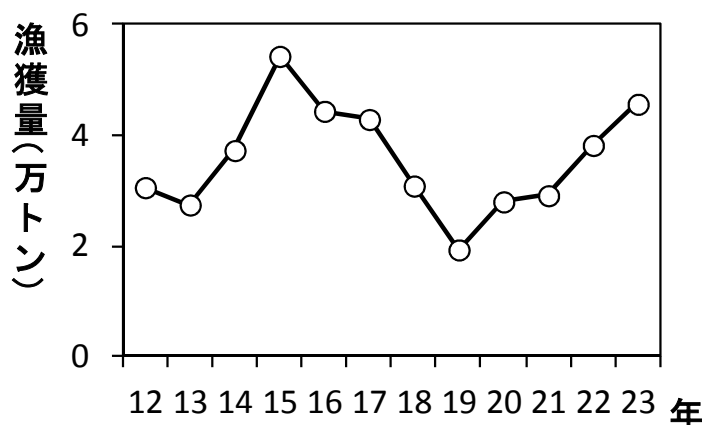


図 1. 東シナ海～日本海南西海域（大中型まき網）によるマアジ漁獲量の推移

山陰沖の漁況と今後 島根県の中型まき網によるマアジの漁獲量は平成 12 年度以降、2～3 万トンで横ばい傾向にあります（図 2）。平成 23 年度下半期は 19,658 トンの漁

獲があり、前年同期（15,623 トン）の1.3倍、平年同期（11,449 トン）の1.7倍でした。

今後の漁況は、漁獲の主体となる1歳魚（大きさ15～20 cm：H23年生まれ）と2歳魚（大きさ20～25 cm：H22年生まれ）の山陰沖への来遊状況と、夏季以降漁獲対象となる0歳魚（大きさ5～15 cm：H24年生まれ）の加入状況によって決まります。1・2歳魚の来遊状況は、山陰沖の海水温の分布状況の影響を大きく受けます。今期の山陰沖を含む日本海西部海域の50m深水温が平年並みとの予報（平成24年度第1回日本海海況予報、水産総合研究センター日本海区水産研究所、平成24年4月9日公表）通りに経過すれば、春季の低水温により来遊状況の良くなかった前年（H23年）は上回ると考えられます。ただし、今期に1歳魚となる平成23年生まれの加入状況は、直近までの漁獲状況から判断すると低いとは言えませんが、マアジ新規加入量調査^{*}の結果では低く見積もられています（図3）ので、今後の動向を注視する必要があります。

これから山陰沖に加入してくる0歳魚の状況は今後調査予定ですが、前年並みとすれば、全体の来遊量は前年を上回ると予測されます。

^{*}マアジ新規加入量調査：山陰沖へのマアジ0歳魚の加入量を早期に把握するための調査です。加入量指数が高いとマアジ幼魚の豊度が高いことを表します。詳しくはトビウオ通信 H23年第5号 http://www.pref.shimane.lg.jp/industry/suisan/shinkou/umi_sakana/tobiuo/index.data/2011no05.pdf をご覧ください。

マサバは前年並み

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマサバの漁獲量は、資源水準は依然として低いながらも近年上向き傾向にありましたが、ここ2年は減少しました（図4）。平成23年の漁獲量は4万トンで前年・平年を下回

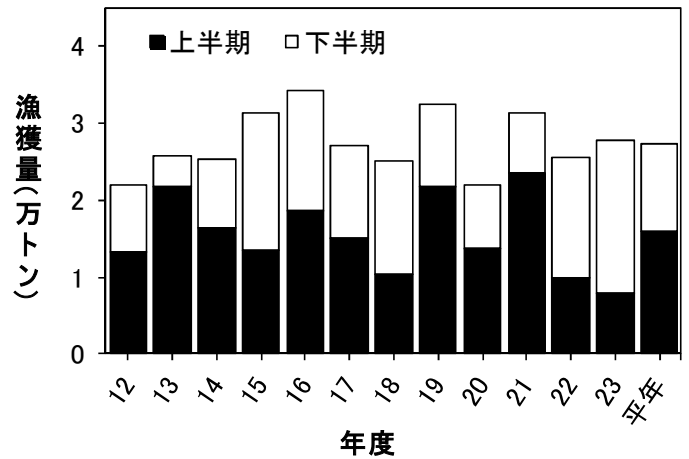


図2. 島根県中型まき網によるマアジ漁獲量の推移（年度別）

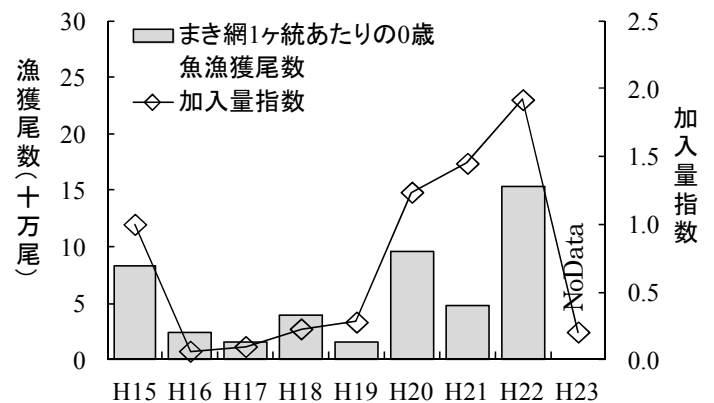


図3. マアジ新規加入量調査による加入量指数と6～12月におけるまき網（境港）1ヶ統あたりの0歳魚の漁獲尾数（H23年は未集計）

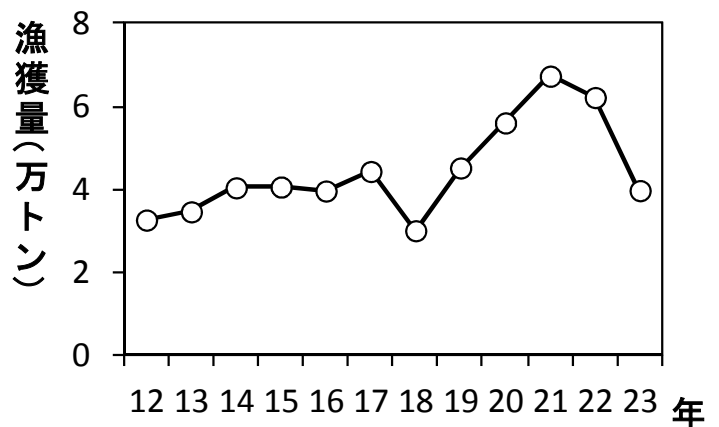


図4. 東シナ海～日本海南西海域（大中型まき網）によるマサバ漁獲量の推移

りました。

島根県の中型まき網によるサバ類の漁獲量は、主漁期にあたる下半期の経年変化をみると、増減を繰り返して推移しています（図5）。平成23年度下半期の漁獲量は13,712トンで、前年同期（11,048トン）の1.2倍、平年同期（13,052トン）の1.1倍となり、前年を上回り、平年並みの漁況でした。

今期は盛漁期にはあたらないため、今後漁獲は低調に推移しますが、1歳魚（25～30cm：H23年生まれ）が漁獲の主体となり、夏以降は0歳魚（15～20cm：H24年生まれ）も漁獲されます。1歳魚の資源水準は前年並みとされています。また、0歳魚の資源水準は予測が困難ですが、親魚量の水準や初期生残に関わる環境要因（海水温が低水温傾向）からみると前年並みと予想されています。従って、全体の来遊量は前年並みと考えられます。

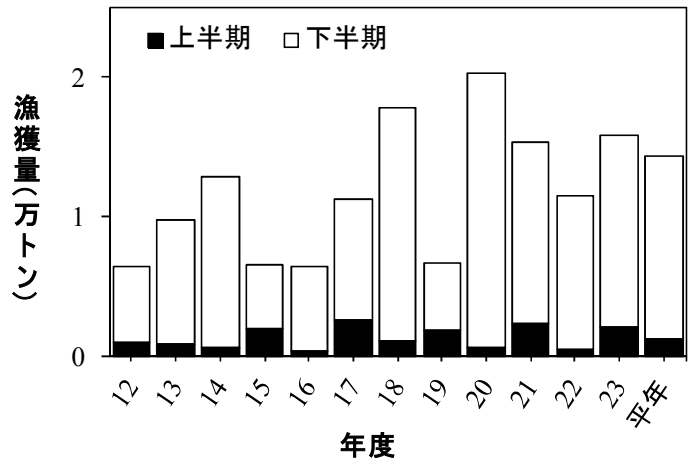


図5. 島根県中型まき網によるサバ類漁獲量の推移（年度別）

カタクチイワシは前年並み

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、平成13年度以降増減を繰り返して推移しています（図6）。平成23年度下半期の漁獲量は2,698トンと、前年同期（4,395トン）の6割、平年同期（5,984トン）の5割でした。

今後の漁況は、漁獲の主体となる0歳魚（大きさ5～10cm：H24年生まれ）と1歳魚以上（大きさ12～14cm：H23年以前生まれ）の来遊量で決まり

ます。H20年生まれ以降のカタクチイワシは同程度の資源水準にあると推測されています。また、H24年生まれは、その産卵親魚の量と漁獲状況から前年並みと判断され、近年の山陰沖では本種は3～5月にまとまって漁獲される傾向が強いことを勘案すると、今期は4～5月に前年並みの来遊状況になると考えられます。

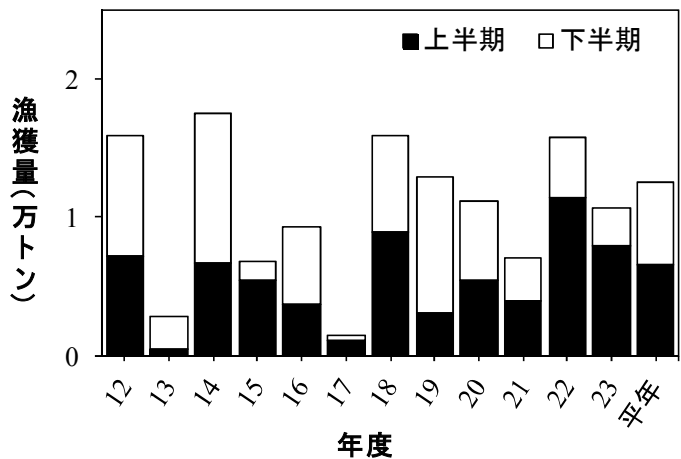


図6. 島根県中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量の推移（年度別）

ウルメイワシは前年を上回る

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、平成14年度以降はやや増加傾向にあります（図7）。平成23年度下半期は近年にない豊漁で漁獲量は15,025トンと前年同期（4,631トン）の3.2倍、平年同期（3,046トン）の4.9倍と好調でした。

今後は、主に春季（4～5月）と夏季（6～8月）に来遊する群で構成され、漁獲の主体は1～2歳魚（大きさ18cm以上：H22年～H23年生まれ）と夏以降の漁獲に加わる0歳魚（大きさ5～15cm：H24年生まれ）となります。平成10年以降の春季と夏季（4～8月）の合計漁獲量と前年の産卵親魚量の間には正の相関があります。平成24年の推定産卵親魚量から漁獲量を予測すると、今期の漁況は前年を上回ると考えられます。

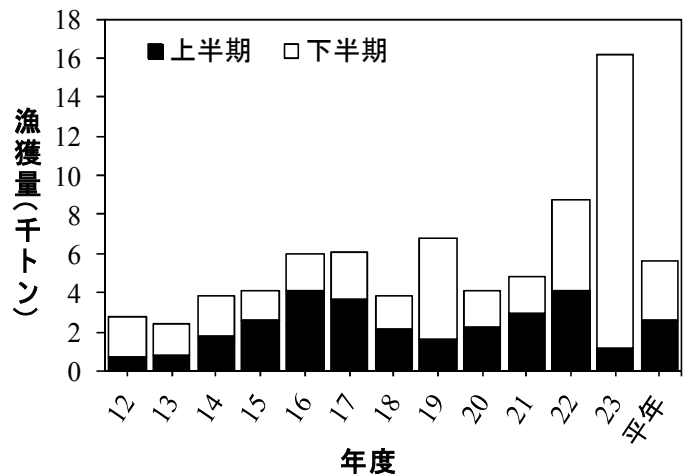


図7. 島根県中型まき網によるウルメイワシ漁獲量の推移（年度別）

マイワシは好調であった前年並み

島根県の中型まき網によるマイワシの漁獲量は平成15年以降回復傾向にあり（図8）、特に平成23年は4～6月にまとまった漁獲があり、近年では例のない豊漁でした。平成23年度下半期の漁獲量は2,935トンと前年同期（225トン）の13.1倍、平年同期（1,188トン）の2.5倍と好調でした。

今後の漁況は、漁獲の主体となる1～2歳魚（大きさ15～20cm：H23年～H22年生まれ）と夏以降の0歳魚（大きさ15cm以下：H24年生まれ）の来遊量で決まります。平成23年の豊漁を支えた平成22年生まれ（2歳魚）と平成23年生まれ（1歳魚）は、直近までの漁獲状況等から同程度の資源水準と考えられています。また、予測が困難な0歳魚を前年と同程度と仮定すると、今期の来遊量は好調であった前年と同程度と考えられます。近年、マイワシ全体の資源量は回復の兆しがみられていますが、その水準は昭和50年代～平成初期にみられた豊漁にはまだ及ばないため、今後の動向を注視する必要があります。

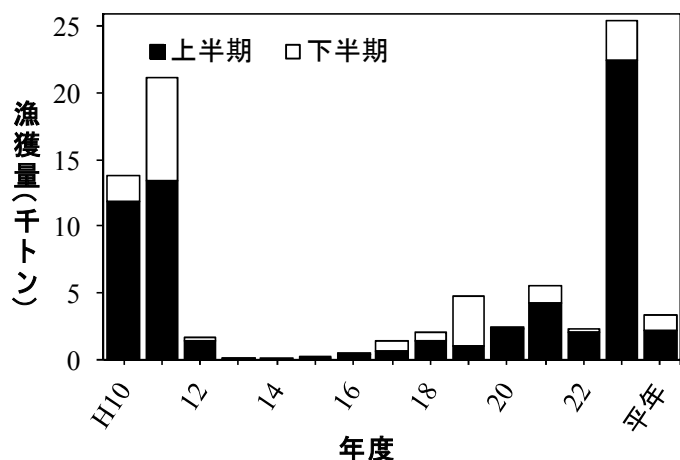


図8. 島根県中型まき網によるマイワシ漁獲量の推移（年度別）